

告 訴 調 書



注 意

一 作成するときは、被告又はその家族のあつたとき、  
二 書面によりこれを受けた場合に調書を作成する必要  
があるときは、供述調書（乙）を使用すること。

住居 金沢市泉ヶ丘二丁目一番三三号  
職業 会社員  
電話 四二局一七六四 番

氏名 安藤 健次郎  
昭和九年二月二十五日生（五七歳）

右の者は、平成四年五月二日 石川県金沢西警察署  
において、本職に対し、  
とおり供述して告 訴 した。  
事件につき、次の

一、  
私は、今言及住居地は  
家族とともに生活をして  
おります。  
ところへ

私と私の妻 紀世

との間に生れた

長女 安藤 文

か、  
去る

本年四月一日の夜

長女文が勤めていた

運送会社への

トウラク運送手

廣野、木下 樹

に殴られ、その日の夜、

振るわれ、それが元で

文は大怪我を負い

現在も

意歳不明の重態で  
県立中央病院に入院中  
ふります。  
しめし

長女 文は 廣野に  
暴力を受けりて 当日

廣野から 強姦された  
いふ

ことを知り

廣野も 嚴重に処罰して  
ほく

本日 実の父である私が

三川県警長目氏



文と答へて

また訴をする次第へ

ありまう。

二、廣野が

文と強姦した

という事実については

廣野自身から

その事実を認め

いる事

さうには、その疾苦に基いて

文の腔内を

お医者さんに調べて

もらう、ところ

精液が採取された。

ということから

内臓のいらないことである。

三  
廣野と文との関係については  
単に

勤めていた会社が

スミスというところ

廣野が運転手として働いて

あり

文がその会社の事務をやった

こともあつた

会社の関係というのみで

私の知る範囲にのみ

石川県警目氏

一人とは

男と女の関係は全く

無かった

のようである。

四 本年四月一日に

廣野は金沢西署に  
逮捕され

その後の警察官の捜査及び  
廣野自身の手記から  
犯人廣野は

かなり前から

文に好意をもっている  
らしく、交際を繰り返した



通つてゐたのです。  
 しかし當時の文は  
 廣野に対し特別な支持  
 を以て抱いてゐるが  
 交際して行くことを  
 断つたところ  
 よう四月一日の夜に  
 廣野が一方的に腹を  
 文に打ち蹴る  
 ようなことを  
 文が抵抗するとも  
 休む意思を表明する  
 ことがないことと

午後八時五十分頃

金沢市善正寺町左衛門地  
の  
犀川左岸にある

船上げ場横の空地

に、廣野の車の中へ

侵入してゐる

文と廣野が強姦  
した

五.

の文が

毆打したりしてゐる時  
も

姦淫してゐる



廣野！

休を許すはあか  
ありまさん。

廣野！は

さんさん

文と段、スリー

抵抗をなさような状態に  
—スうえ

自分の欲求のみで

文と強姦—たのめ。

何と卑劣な男—うか

絶たに許すことか、さうか

うと。

六 先程から

前——こゝろに

文は 廣く受け入

るから

入院中 〆身あり

——

意識不明

口をこ——切きく

こゝろ

いねは

植物人 〆身あり

〆身あり

のこ

た。

このように状況はさうか

文本人か

を訴へる

は不可能である

検査の結果はさうか  
一、認めよう

文の奥の父である

文に替わって、  
文の奥の父である

のさ。

文は

この事件後

四月一日

三川景隆氏



金沢西署の方に来た

日頃の

文の生活状態を  
お節一ノミ

担当の警察官から

文が黄野から

と南まうす

といふ

この強姦の事実を

黄野にけの供述をけ  
ふはなく

科学的にもは、さうと

させるため

文の腔内液の採取や

血液採取などをして

めず。

とに角

文は

口をど

きける状態

るは無く

担当医の節へは

元の体に戻るか

どうかといふも

は、フィリッス返

事へ

もうえな

といふ状況です。

三川景隆氏

八 犯人廣野は

申くと

圓を都府能都所の未身で  
母親と二人暮らして

あ、その人が本人か

高校を中退して

方々傷物まにあてよう

金次に落ち着いた

アパート住いそーるから

文と同じ会えた

市内二町にある

市場急配センター

トトウク運転手と



像といふところ。

私自身

その廣野の森

といふ思ひは

この事件が

はじめて

あり

あつた家とは

親類関係なく

思ひ

ひ

九廣野一人の美

妻は

三川書院 峯冬月氏

文が可愛相ふと

言ひて泣いてありまうし

私侯の家庭とやのまの

暗くなつてしまひました。

廣野は

さうと自分の口から

文を強も一ス

と云ひつゝのこす。

このやうな

現由があつたにせよ

廣野の

行ふ事は

人間としての価値も





石川縣警署用紙

引込部員  
警部補 村之康夫